

鷺宮高校 社会科FW・活動通信 Vol.16(2024. 9 月)

社会科同好会編⑦ 帰還者たちの記憶ミュージアム(平和祈念展示資料館) 見学

9月29日(日)午後1時半～3時、「帰還者たちの記憶ミュージアム(平和祈念展示資料館・総務省委託)」を見学しました。大江戸線「都庁前」1分、丸の内線「西新宿」5分、「新宿」西口10分の場所にある、新宿住友ビルの33階が資料館になっています。参加者は生徒3名、教員2名です。

この資料館では、「兵士」「戦後強制抑留者」「海外からの引揚者」について、知ることができます。1945(昭和20)年8月9日、ソ連軍が中立条約を破り、満州や朝鮮北部に攻め込み、日本の軍人たちはシベリアやモンゴルなどへ送られました。その人数は、約57万5千人と言われます。抑留者はラーゲリと呼ばれる収容所に入れられ、マイナス30～40度の厳しい環境のなか、労働を課されました。「引揚者」は満州・朝鮮・台湾などから、多くの犠牲を出しながら帰国した民間人―残された女性や子ども、老人たち―を指す言葉です。ガイドの方にていねいに解説いただきました。特別企画展「15歳の少年兵の記憶」も開催されていました。1942年に始まる海軍特別少年兵(14歳～16歳で採用)の一期生は約6割、二期生は約4割が戦死したそうです。



以下、生徒の感想を紹介します。

- ◆人生で初めてシベリア抑留の資料を読みました。ロシアでの極寒の中、あんなにも薄い手袋で、コートで作業していた人たちがいて、それを見守ったり暴行したりするロシア人。人間ってここまで過酷な状況でも生きられるのだな、と思ったと同時に、こんなにも酷いことをできるんだと感じました。
- ◆丁寧でわかりやすい展示解説と、更に視覚からも戦争のことを知れてとても為になりました。
- ◆昨日、『私は貝になりたい』を見て知ったこととかが出てきてびっくりした。『ラーゲリより愛を込めて』を見たことがあったけど、今回の抑留の話聞いて急に連れていかれて働かされて本当にあつてはならないことだと思った。シベリアはとても寒い地域なのに袖を売ってまで黒パンを買うという話を聞いて、それほどご飯が少なくて厳しい生活を送っていたんだと思った。その上に重労働なんてありえないと思ったし、日本に帰って来れなかった人を見るともっとシベリア抑留について知ってほしいと思うし、学ぶべきだと思った。



■ 看護婦だった女性も抑留されました
■ 飢えて、パンと袖を交換したコート

